

慶應義塾に関連した出版物や教職員の最新著書などを中心に、本に関する情報をお届けします。

命とくらしが保障される社会をめざして
あえて増税の必要性に切り込む

『幸福の増税論―財政はだれのために』

井手英策（経済学部教授）著
岩波新書／907円（2018年11月）



多くの先進国ではリベラル陣営が人々の命とくらしが保障される温もりある社会を作りあげるために増税を訴えている。著者は「なぜ日本では、『連帯のしくみ』であるはずの税がこれほどまでに嫌われるのか」という問題提起から、共同体をつくることの意味や国家の成り立ちを説き起こし、税と財政の役割を明快に説く。そして「増税」の必要性に切り込み、大胆な財政改革、社会改革の構想を提言する。それは「勤労と節約と貯蓄による自己責任の社会」から「頼りあえる社会」への転換だ。税や国家財政の仕組みを根本的に勉強してみたいという人にもお勧めできる。

教職員執筆の最新刊

●イワン・クラスター著、庄司克宏（法務研究科教授）監訳

『アフター・ヨーロッパ・ポピュリズムという妖怪にどう向きあうか』岩波書店／2052円（2018年8月）

●土屋大洋（政策・メディア研究科教授）ほか著

『サイバー空間を支配する者―21世紀の国家、組織、個人の戦略』日本経済新聞出版社／2484円（2018年8月）

●片山杜秀（法学部教授）著

『平成精神史―天皇・災害・ナショナリズム』幻冬舎／972円（2018年11月）

●高桑和巳（理工学部准教授）編著、ほか著

『デリダと死刑を考える』白水社／3240円（2018年11月）

●友岡賛（商学部教授）著

『会計学の考え方』泉文堂／2484円（2018年12月）

●平野裕之（法務研究科教授）著

『新債権法の論点と解釈』慶應義塾大学出版会／3888円（2019年1月）

慶應義塾の1冊

『精選 折口信夫』第1巻〜第VI巻

折口信夫著
慶應義塾大学出版会／各3024円



小説『死者の書』や釈道空の号での短歌・詩作品、さらに国文学・民俗学・芸能史・宗教学におよぶ研究など、独自にして多才な業績を残した折口信夫。この20世紀の知の巨人は、慶應義塾で芸能史、文学史、国文学演習を講義した縁がある。没後65年となる昨年11月より配本が始まった『精選 折口信夫』は、膨大な折口信夫の代表作を、「異郷論・祭祀論」「II 文学発生論・物語史論」「III 短歌史論・道空短歌編」「IV 芸能史論」「V 随想ほか・道空詩編」の5巻に編纂し、著者の写真や遺墨・私家版類などを集めた「VI アルバム」を加えた全6巻のアンソロジーである。